

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値 103 円 55 銭をあっさり割り込み、2013 年 11 月以来の 100 円割れとなり、一時 99 円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95 円割れをもイメージする必要が出てきました。

95 円水準は、2011 年の安値から 2015 年の高値の 61.8% 戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、52 週移動平均との乖離で見ると、6 月 24 日につけた 99 円では約 15% の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した 2008 年の下方乖離とほぼ同じ水準になりことから、過度な下がり過ぎの反動での短期的なドルの戻りも期待され、また日本のリコプターマネー政策への思惑が円の上値を抑える要因となっていることから、100 円～110 円のレンジ相場の継続が意識されてきました。

ただし、8 月に入ってからのドルの戻りは非常に鈍く、上値の重さが際立ってきており、年末に向けてのドル安リスクが高まってきていることには注意が必要であり、日米に金融政策の行方を見極めたいところです。

ドル/円相場のトレード戦略

■ 短期展望

先週は、週末の米雇用統計への期待からドルは堅調推移となり 104 円まで回復する動きとなりました。

米雇用統計は、非農業部門雇用者数が前月比+15.1 万人と市場予想の同+18 万人を下回ったほか、失業率や平均賃金も弱い内容だったものの米長期金利利回りが上昇に転じると、ドル/円も反発し、104 円ちょうどを上抜けてストップロスを巻き込みながら上伸しました。

この動きから先週末のドル上昇は、米国の早期利上げ期待が高まったというよりは、米国市場の3連休を前にドルショート（円ロング）が巻き戻された結果に過ぎないとの見方も出来ます。そう考えると、今週も米国の利上げ期待の高まりからドルの上昇が続くとは考えにくく、明確な方向感が出てくることを期待しにくい相場となりそうです。

したがって、今週は積み上がった円ロングの調整がさらに進む場合は 106 円半ばまでの上昇のありえるものと考え、102 円~106.50 円のレンジを想定しながらも、ドルの戻り売りのタイミングをうかがう戦略が有効と思われます。